

「行って、あなたも同じようにしなさい」

先週の礼拝で、「天の国は平和の子を目指してやってくる。」と申し上げました。そして今日、私たちはイエス様から「誰が平和の子であるか」その具体的な例を明らかにしていただきます。

「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」

この律法の専門家が、イエスさまに投げかけた質問は、まさに天の国についての問いかけです。彼はイエスさまを試そうとしています。だが、それに対する答えはとても単純なものでした。

「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」

それを聞いて、専門家はここぞとばかり答えます。

「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい。とあります。」

理想的な答えです。しかしそれは自分事ではありません。文字に書かれた、守るべき約束事です。ですからイエスさまは言われました。

「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

全てを捧げて、神様を愛する。私たちにそのようなことができるでしょうか。また、隣人を自分のように愛する。私たちにそのようなことができるでしょうか。

イエス様の御言葉は、私たちにいつも本当の自分に立ち返ることを求めておられます。神様の前で自分の正しさを誇るができる人間がいるでしょうか。私たちはいつも恐れの中に生きています。自分とその周りの安全しか考えていません。今再び世界中で嵐のよ

うに吹き荒れている、偏見と差別はこの表れです。

私たちの周りでも、外国人差別を煽り立てる演説が、毎日のようにメディアから流れてきます。これは本当に異常なことです。倫理という言葉は死語となってしまいました。

暴力団でもあるまいし、一国の首相が「なめられてはならない」などと口にするのは恥ずかしい言葉です。ふさわしくない対応には理を尽くして説明して、正しく変更を求めるべきです。

何かと面子にこだわる人間は、物事を適切な言葉で表す事が出来ません。けれど自分が持っているブランドに強い執着があります。国籍や民族、学歴や職業、住んでいる場所や着ている洋服、様々な Tag を付けないと、安心出来ません。「なめられてはならない」からです。

イエスさまが語られる、追いはぎに襲われた人を見ているのに、無視して反対側をただ通り過ぎていく、祭司も、レビ人も、二人とも自分の持つ「祭司」や「レビ人」というタイトルを見えています。彼らは人間ではありません。人間の尊厳を認めることの出来ない、「ひとでなし」です。いま私たちの暮らしを本当に脅かしているのは、決して外国人ではありません。このような人の心を持たない、「ひとでなし」たちです。

家族を騙り、人をだましておどかして、詐欺を働く集団の多くは日本人です。社会の中で孤独で弱い人たちが、残酷な犯罪者たちの餌食にされています。これをただ見過ごしているのは、「祭司」や「レビ人」と同じです。

ところが、旅をしていたこのサマリア人は違います。その人を「気の毒」に思って、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注ぎます。これは消毒と消炎と鎮痛の作用があります。とても適切な応急処置です。すぐ自分の家畜に乘せ、宿屋に連れて行き介抱します。

本当に他人事ではありません。この暑さに家の近所でも熱中症で倒れ込んでいる人を見かけます。けれど私が通りかかった時には、いつも大勢の人が助け起こしたり、携帯電話で通報をしたり、ペットボトルを差し出したりしています。東京の人情は、まったく捨てた物ではありません。けれどこのサマリアの人は、宿屋の主人におよそ二日分の日当にあたるお金を渡して言います。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います』なんと行き届いた配慮でしょう。

サマリア人は旅人です。言うなれば異邦人です。地元の間人である祭司やレビ人が見捨てた、大怪我をした人を見て、真実に心を痛めたのは、異邦人でした。

「誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」

イエスさまの質問は、真っ直ぐに心に刺さります。どこの国の、どの民族で、どんな家柄で、何の仕事かは全く関係ありません。どんなレッテルやラベルも Tag も、神さまの前では全く意味がありません。日々愛を感じて、愛に生きているか。ただそれだけです。

平和の子とイエスさまが言われたのは、このような人たちです。平和とは和解のおこないです。苦しむ人の姿を見て見ぬ振りして、安全と利益を考えて、道の反対側を通り過ぎていくのは、あらそいの世界に生きる大人たちの振るまいです。

けれど悲しむ人、苦しむ人を置き去りにして、神の国は決して私たちの世界にやって来ません。人と人とが本当に出会うところに、神の国がやって来ます。平和は人の心に宿ります。武力で人を押さえつければ、そこには悲しみと怒りと憎しみが生まれます。

香港では今も静かに、警察権力によるキリスト教弾圧が強まっています。多くの学生や民主化運動の活動家が投獄されました。監禁は長期間に及び、拘留中の再逮捕と起訴が行われています。これまで認められていた、獄中での聖餐も停止されていると聞きました。

これは明かな人権蹂躪です。監禁されて言論の自由を奪われて、宗教活動を禁じられるのは、襲われて服をはぎ取られ、殴りつけられるのと同じです。入牢者の魂は瀕死の状態で喘いでいます。いまこそ私たちはイエスさまの声に従わなければなりません。

「行って、あなたがたも同じようにしなさい」

来年の 2 月に、私は台湾、マカオ、香港に行って、そこで迫害に耐えながら生きる、キリスト教徒の方々とお話をする計画を持っています。状況は大変に厳しいです。けれどただこれを見過ごし、同じ道の反対側を通っていく事は、私にはどうしても出来ません。

毎年二回、超教派の牧師や信徒が集まって、香港のための祈りを続けて来ました。けれど状況は厳しさを増すばかりです。世界政治も大国の独善主義によって、大きく平和が揺らいでいます。そして今この国でも、排他主義を掲げて、民族主義を恥ずかしげも無く打ち出す政治団体が、雨後の竹の子のように立ち上がっています。

借り物の皮を被った愚か者の主張は、勢いばかりで底が浅くて、下心が透けて見えます。国粹主義者は強い怒りを込めて、他の民族と他宗教と他国を非難します。しかし愛国主義の心中にあるのは、「社会から不当に蔑まれた、この私に対する自己憐憫」です。

「古きよきあの頃に帰ろう」国粹主義者はよく言います。けれどそんな物はありません。それは単なるノスタルジー。幻影です。政治は倫理です。世界を少しでも良いものとするために、すべての人の人権が守られるために、私たちは憐れみをもって活動します。さらにすべての被造物が、人間によって破壊されないように、力を尽くして守る責任が、私たちにあります。イエスさまは私たちに告げられます。

「行って、あなたも同じようにしなさい」

主の呼びかけに、喜んで応えて立ち上がりましょう。